



# 京都歴史裏の小説

---

まだ誰も知らない秘密の  
京都

---

音川伊奈利

---

京都歴史裏の小説～石川五右衛門り罪名は不義密通...釜茹での刑 その2

石川五右衛門といえば天下の大泥棒として有名だが、では何を盗んだかは定かではない。そして処刑される前に「石川や浜の真砂は尽くるとも世に盗人の種は尽くまじ」と辞世の句を残したその中の「世に盗人」を泥棒と勘違いされているのです。これは当時の犯罪では10両盗めば首が飛ぶと同じくらいに罪が重たかった「不義密通」も罰金10両で払えなかったら首が飛ぶという人妻泥棒だったのです。つまり、「世に人妻の種は尽くまじ」が本当です。

この五右衛門は豊臣秀吉が建立した方広寺の大仏の門前で「石川屋・大仏餅」という餅屋を営んでいた。この大仏は奈良の大仏より大きく、また日本一の梵鐘(国宝・国家安康)もありました。店の前の街道は伏見街道で京から伏見港、そして三十石船で大阪へのメイン道路で賑わい「大仏餅」は伊勢の名物「赤福餅」よりも有名でした。つまり、大金持ちなのに泥棒なんてものはしません。

店は伏見街道正面上がるにあり、この正面とは大仏の正面になることから名づけられている。番頭、手代、職人、丁稚、女中などの50名の大所帯が住める店舗兼屋敷で裏には鴨川があり、ここから餅米や小豆を高瀬舟で運んでいた。五右衛門は丁稚から20年以上勤めた職人には「のれんわけ」をしている。いまでいうチェーン店のようなもので京都市内にはもう6軒の大仏餅〇〇店があり、どれも繁盛していた。

そして7軒目の「のれんわけ」の決まった職人には店を与えていたが、まだ職人も丁稚も雇える身分ではなく嫁をもらって二人で店をきりもりする仕組みになっていた。そしてその夫婦の仲人は五右衛門だったが、ある娘が妻となったその瞬間にその妻がほしくなるという五右衛門の性癖というか、もって生まれた病気だった。妻にすれば結婚と同時に店の開店と環境の変化に身も心も疲れ果てるのは先の6軒の新妻も同じ...五右衛門はそれを見越して毎日のように店に現れ何かと世話をしていたから妻と五右衛門が仲良くなるのはそう時間もかからなかった。

ところが7軒目の店長でもある伊之助はこれまた「やきもち」で妻と五右衛門の仲を疑い監視していたら、案の定五右衛門から本店に行くように命じられたその日に妻との密会の現場を見つけてしまった。頭にきた伊之助はそのまま北町奉行所に駆け込んでいた。その日の内に任意で五右衛門は取り調べられていたが、五右衛門は自慢のごとく7名との不義密通をあっさり認めていた。

五右衛門にすれば不義密通の相場は10両ですから70両だせば釈放されると信じていた。しかし、奉行所の判例では不義密通一件につき10両は数多いが、7件の判例はないから下手な判

例を出せない。しかも瓦版がこの不義密通を大きく報じているから奉行所も罰金では収まらないと死罪を宣告した。

処刑の場所はこれまた皮肉にも五右衛門の屋敷のすぐ裏の六条河原で店から小豆を煮る、大釜を持ち出し、ここに五右衛門を入れて釜茹でにしたのです。そして、辞世の句に、

「石川屋 釜の小豆は 尽くるとも 世に人妻の 種は尽くまじ」

★～東山区の本町通り正面の北西角(元郵便局)が「石川屋・大仏餅」の店舗でそこから北に3軒(元文房具店)までが石川五右衛門の屋敷跡です。この屋敷の井戸が深く掘られてすぐ裏の鴨川まで抜け穴があるとされている。もし、京の名物「石川屋・大仏餅」が復活したら京都のお土産にもなるかも～♪

[京都歴史裏のコラム...「桓武天皇と伏見稻荷大社の物語」](#)

[無料の電子書籍](#)

[音川伊奈利のブログ・楽天ブログ](#)

[音川伊奈利のブログ・アメーバ](#)

★～京の大仏...奈良の大仏より大きく作られたが、落雷が原因の火事で下半身が焼けてしまった。私が子供のころにはまだ大仏の胸から上の大仏があったが、それも火事で焼けてしまった。これらの関連画像は↓のブログにあります。

<http://ameblo.jp/inari24/entry-11730786908.html>

### 京都歴史裏の小説...祈禱師・浄蔵貴所...その1

祈禱師、浄蔵貴所といえば一条戻り橋で父親の葬儀の棺桶から祈禱で父親を一時的に蘇生させたことで有名です。それから1000年の今も葬儀の列や霊柩車は死者が蘇るということでこの橋を渡らないという。また、八坂の塔が台風で傾いたが、これも祈禱で元に戻してそれから1000年も建ったままです。

しかし、それは浄蔵貴所が天皇に祈禱が認められ有名になったころの話で若いころは比叡山で修行をしたのち吉祥院村の寺で住職兼祈禱師として吉祥院村、鳥羽村、西七条村の悩める女性を祈禱して生計をたてていた。女性の悩みといえば今も当時も同じで不妊、夫の浮気や暴力、それに若い女性の恋の悩みだった。それプラス貴所は背が高くてイケメンだったからその噂は都中に知れわたっていた。その寺は「浄土宗西山禅林寺派清行山三善院浄蔵寺」という長い名前の寺だが今もあります。

当時、貴所は879年生まれの二十歳、貴所の祈禱を受けたい女性を手際よく祈禱していたが、その悩みが不妊で若い人妻で貴所の好みになると貴所はご本尊の前で護摩木を燃やして念入りに祈禱したのだが、その不妊の女性のほぼ100%がその後妊娠していた。さらに生まれた子供の姓名判断、名付け親としても信頼されていた。

しかし、貴所が有名になれば有名になるほど他の祈禱師、陰陽師、占い師などからも「妬み」「嫉妬」で悪い噂を流されていた。それは、貴所が若い人妻を自ら種付けをしているというものだが、それは間違いで加持祈禱といっても本堂はオープンにして老若男女が一緒に拝んでいる。そして、その若い人妻の親や夫も参加しているから貴所は指1本も触れてはいない。

貴所が好みとする女性だが、それは血色もよくふくよかな顔のことになる。これは健康であるから妊娠は容易いという確立になる。そして貴所は祈禱の後に一言二言問診をしている、

「月のものはいつありましたか？」

「はい、たしか～9月の月初めぐらいから...」

「そうですか～それなら13日から17日の間に最低でも3日ほど愛し合ってください」

「はい～3回もですか～」

「3回でも5回でも旦那に協力を願って...なんなら上に乗って無理矢理にでも...」

「あっ、はい、そうします」

これは今でいう妊娠の危険日でその反対を教えているだけだったが、こういう科学的な要素を勉強しているのが俗に言う「よく当たる」祈禱師なのです。しかし、たまにはこの問診の中で若

妻から悩みを聞くこともある。その人妻は室町の呉服問屋の律子というが、  
「先生に教わった通り旦那さまと3日3晩愛し合いましたが、子供は授かりません。旦那さまが  
いうには都で一番の祈祷師に加持祈祷されてできないのは私が悪いと離縁されそうなんです」  
「そうですか～それなら私が祈祷をしても無駄になります」  
「そんな～先生～なんとかお願いします」

貴所はこの人妻の律子に一目惚れをしていた。  
そして次にも合えるようにと夫からの愛の日を一週間ほど加減して祈祷していたのです。貴所は  
、  
「律子さん、それなら私ではなく直接、仏様に祈祷させますが、それは他言無用でもし他言され  
ると閻魔様からきついお叱りがあるが、それでもいいか?」  
「はい、先生、貴所さま～」  
「おいおい、私は仏さまでない?」  
「あっ、はい、わかっています...貴所さま～仏さま～」

こうして律子は見事に2回目の祈祷で呉服問屋の後継ぎの男の子を授かったのです。  
それがまた噂になり貴所の祈祷より、仏様の祈祷がいいと若い人妻が寺を訪れて大繁盛したとい  
うお話でした。(1話完)

この小説の関連画像は↓のブログにあります。

<http://ameblo.jp/inari24/entry-11729485458.html>

京都歴史裏の小説...明智光秀と織田信長の人妻奪還天王山の戦い その3

織田信長は男色家といわれているが、女子も好むという両刀使いだった。信長が京の宿としていたのは本能寺で蛸薬師油小路東角にあったが、これは寺というより城作りで堀も物見櫓もあった。寺の西側の通りは油小路という名前の通りに油問屋が数軒あるが、その寺の反対角には「油問屋・山崎屋」がある。その山崎屋徳平の妻にお種という新妻がいた、そのお種に恋をしていたのが明智光秀でそのお種を本能寺の光秀の部屋に呼んでは密会を重ねていた。

それを知っていた亭主の徳平も天下人の信長の最高幹部でもある明智光秀には逆らえなかった。ところが信長も人妻に目がなかった人物で、しかも徳平の妻で光秀の女となると余計にほしくなるのが信長の嫌な性格。そこで邪魔な光秀を中国征伐の兵を出せと命令していた。その夜、光秀とお種は、

「光秀さま～わたしはもう光秀さまのいない都には住めません...」

「そうか～どうせ信長はお種を手に入れるために何でもしてくる」

「光秀さま～怖い～」

「それなら、お種の実家の山崎に身を隠せ、きっとわしが迎えに行く...」

そして光秀が出陣したその日の夜に信長とお種はできていた。そして、お種は、  
「信長さま～お種は前から信長さまを慕っておりました～」  
と、お種は時の権力者との二股をかけていたのです。

亀岡の光秀の居城でこの2人の関係をスパイからの書状で知った光秀は、  
「おのれ～信長...敵は本能寺にあり～」と歴史どおりの展開になったのです。そして焼け落ちた本能寺から信長の死体を捜したがみつからない...どんな大火事でも死体が見つからないということはないから、これは信長は生きている、そしてお種もいないというから2人で逃げたと判断して、  
「敵は山崎にあり～」として1万3千の全軍をお種奪還に動かしていたのです。

天王山の麓の山崎の地というのは、西国からも北陸からも油が集まる大油市があったのです。当時の油は照明用に使う菜種油が主で旅籠も女郎屋も完備する賑やかな宿場だったのです。やはり信長は数人の家来のみでお種の実家の油問屋に隠れていました。そしてお種と信長を真っ裸にして重ねて寝かし刀で突いて殺してしまったのです。

ところがこの全軍移動のしんどい作戦(京→亀岡→本能寺→山崎)は「光秀と信長の人妻争い」のためだったかと武将はもちろん足軽、雑兵までもがガックリきて戦意を消滅させたばかりか、「

アホらしい～」と行ってんでパラパラに京の都に帰ってしまったのです。そこに羽柴秀吉の1万の軍勢に攻められたのですから光秀は数人の侍だけで坂本城に逃げたがその途中の山科の竹藪で農民に殺されてしまったのです。

歴史の陰に人妻あり...もし光秀が人妻に手をださなかったら、もし、信長が光秀の愛人に横恋慕しなかったら。もし、東寺の空海が西寺の守敏の妻に手をださなかったら、京都の入り口には今も国寺の五重の塔が二つ並んでいた。もし、石川五右衛門が番頭の妻7人と不倫していなかったら、「石川屋・大仏餅」は京都のお土産の代表だったのに...もし、私もあの時...

★～画像の1は、大山崎町の油祖・離宮八幡宮。2、信長の安土城...大手門から本丸までの石段は405段、門を入れてすぐ左には羽柴秀吉の屋敷、本丸の隣には森蘭丸の屋敷と歴史どおりの展開になっています。3、標高180メートルの山の頂上にある天守閣の礎石址。ここから見る琵琶湖の対岸には光秀の坂本城があるから、信長は北国からの守りとして光秀をかなり信用していたが、もし、人妻を取り合っていないならば、日本のすべての歴史が変わっていたのです。

この関連記事の画像は↓のブログで

<http://ameblo.jp/inari24/entry-11732064964.html>

京都歴史裏の小説～空海(弘法大師)のラブホテルは羅城門 その4

平安京の入り口には羅城門があり、その両脇に国寺の東寺と西寺が同じ規模同じ五重の塔で競い合っていた。羅城門の外は洛外で畑や田んぼばかりの農村地帯が広がっていた。その村は唐橋村といって主に九条葱を栽培していた。葱の農家はそれぞれ屋号を持ちその屋号の「葱伊」の一人娘に志津がいた。

その志津に東寺の管主の空海(弘法)と西寺の管主の守敏(しゅびん)が一目惚れをしてしまったから、元々犬猿の仲だったこの2人は負けるものかとあらゆる手を使って取り合いになった。志津の父親の伊助は西寺に野菜や米を納入している関係で志津の相手は守敏に決めた。

一方の恋に破れた空海はそれでも志津のことをあきらめなかったばかりか人妻となった志津の色気に前よりさらに好きになっていた。志津を嫁にした守敏は1年ほどは志津を可愛がっていたが、これも根からのケチでやきもちなのか志津の買い物や外出を厳しく監視していた。この守敏は酒癖も悪く、酔えば妻に暴力もふるっていた。これは現在にも通じる話で「釣った魚に餌はいらない」と思っていたのだろう。

空海はそれを見透かしたかのように連日のごとく愛の文(ラブレター)を弟子に持たせて志津に手渡していた。そしてある夜、羅城門で密会の約束までしてしまった。羅城門というのは一ヶ月ごとに東寺と西寺が門番を置き交代で管理していた。門の2階は二十畳ぐらいの部屋になっているから、ここに寝具や行灯まで持ち込み本格的なラブホテルにもなっていた。

しかし、これも守敏に知られることになり怒った守敏は羅城門に駆け上がり弓で空海を狙って矢を放ったが、矢は空海を庇おうとした志津の首に刺さってしまい志津はそのまま死んでしまった。この志津の死は不義密通とされ葬儀もだされず門外の横に穴を掘られて土に埋められてしまった。

それを聞いた村民はこの地に地蔵を祀り、小さいながらも祠も建てられている。その地蔵の首には矢のあとが残っているということからこの地蔵を「矢負地蔵」とも「矢取地蔵」ともいう。この祠は今も羅城門址の片隅にあります。

妻を寝取られ、妻を殺した守敏は都人から笑われ、妻殺しといわれてからは何をして上手くいかず西寺は廃墟になってしまった。一方の空海は21日の月命日には老若男女が訪れていた。その西寺の現在は巨大の金堂の礎石だけが残っています。歴史を問わず、妻を大事にしなければ妻は空海や私のようなオトコに取られるというありがたいお話でした。ちなみにこの小説は史実



には基づかないものどす。。。

画像①は、羅城門の横にある「矢取地蔵」...②は、今も栄える東寺...③は、妻を寝取られた守敏の西寺址...あるのは金堂の礎石のみ。関連画像は↓のブログです。

<http://ameblo.jp/inari24/entry-11733336969.html>

京都歴史裏の小説...もう一つの五重の塔・西寺の守敏(しゅびん)の悲劇 その4

平安京の入り口は羅城門、その左右に国を守る官寺の東寺と西寺が創設された。東寺の方は現在でも京都の代表的なシンボル「五重の塔」があり、世界遺産にも指定されていますが、一方の西寺は同じ規模の寺院であったが、石碑と金堂の礎石があるだけだ。

東寺は有名な空海、弘法大師が住職だったことは誰でも知っています。一方、西寺の住職はと聞かれてもほとんどの方々が知らないほど無名になっている。その僧は「守敏」といって嵯峨天皇から西寺を、東寺は空海にそれぞれ与えられたが、この2人はライバル意識も強くなにかといがみ合っていた。

824年(弘仁15年)ごろ雨がまったく降らず米や農作物が育たなくなった。そこで天皇は空海と守敏に雨乞いの祈祷を命じました。空海は雨乞いの場所を神泉苑の竜神の池の祠で、守敏は西寺の金堂でそれぞれ祈祷を行いました。守敏は三日三晩睡眠をとらずに真夏に護摩木を炊くのですから今でいう熱中症で倒れてしまったのです。

空海は守敏が倒れたことを聞いたと同時に神泉苑で祈祷を始めたが、その二時間もしない内に天から竜が舞い降りたかというほどの嵐になったのです～それが三日三晩続き、農業用水のため池も満タンになって秋の豊作まで水は足りたとか...一方の守敏の西寺は空海が呼び起こした雷が五重の塔に落ちて金堂などほとんどの伽藍が焼けたそうな～そしてそのまま再建されなくて現在になった。

祈祷で空海が勝った...実は空海は日本中を旅して雨が降る理屈は知っていたのです。京都で一番高い山、愛宕山に弟子の坊主を登らせ山陰方面からくる雨雲、瀬戸内海から六甲山に来る雨雲を見晴らせていたのです。そして愛宕山から合図ののろしが上がるまでは祈祷しなかったのです。つまり、祈祷に見せかけた科学だったのです。

関連画像は↓のブログにあります。

<http://ameblo.jp/inari24/entry-11734516745.html>

京都歴史裏の小説...桂小五郎は7日7晩で人妻7人を妊娠させた。その

勤皇の志士の桂小五郎というのは「逃げの小五郎」とか「人妻殺しの小五郎」と京雀の間では有名な噂になっていました。桂といえば芸妓の「幾松」との愛が歴史的には有名だが、その小五郎が幕府や新撰組から追われて丹波の出石まで逃げた時のことです。

京から山陰街道(国道9号線)を北へ、最初に匿ってもらったのが亀岡の庄屋の屋敷だったが、庄屋は勤皇の志士の大幹部を酒でもてなし村の若い娘を接待係りにしていた。が、小五郎はそれを丁重に断ったが、庄屋はその娘の好み合わないのかと次から次へと娘を部屋に差し入れてきた。それでも断るといふからもしや「男色」かとおそろおそろたずねたら、小五郎は、「いや～実はわしは人妻が好みで...」

それを聞いた庄屋は村中の人妻を頭の中で考えて比較的若い百姓の妻を小五郎に差し出すと小五郎は喜んで一夜をその人妻と楽しんでいた。そして庄屋は次の隠れ家に予定されている園部の商家に使いをだして小五郎の人妻好みを伝えていた。その園部では酒の席から選抜された人妻が小五郎にお酌をしていたから小五郎は上機嫌で「明治政府が出来たらこの園部の村は年貢を免除する」という書状を庄屋に渡していた。

そして次の隠れ家も次の隠れ家も連日若い人妻の接待でようやく8日目で目的の出石に着いていた。その間に7人の人妻との愛だが、もっとすごいのが、その人妻とのたった一度のHですべて妊娠したという。それもすべて男の子であるというが、これはその村の庄屋の大作戦で真実はわからない。

そして明治政府になって桂小五郎は政府の高級官僚になった。その後7つの村の年貢は約束通り免除になった上に桂小五郎の子供とされた7人の男子は明治政府のエリート官僚に就職したというめでたいお話でした。ちなみに明治政府では小五郎は「木戸 孝允」だが、それより前にはHNを10種以上変えているという、私もペンネームをしばし変えて、さらに人妻が好きということで桂小五郎の血を引いていると思っています。

★～桂小五郎の妻「幾松」は芸者で呉服問屋主の妾だった。三本木のお茶屋で幾松に一目ぼれしてからは連日連夜幾松を指名して遊んだ。やがてお座敷の廊下で幾松の旦那と鉢合わせして喧嘩になったが、小五郎は刀を抜いて無理矢理幾松を手に入れていた。

★～いずれ明治政府になったらという約束を小五郎は守った。いずれ民主党政権になったらという約束(マニフェスト)を民主党はまったく守らなかった。しかも、それを認めず少しは日本は良

くなったとほざいた。少しは小五郎を見習ってほしい。

画像①は、桂小五郎 ②は、小五郎が妻と暮らした家、現在は「幾松」という料理旅館になってい。御池木屋町上がる東側  
関連画像は↓のブロックにあります。

<http://ameblo.jp/inari24/entry-11738493450.html>

### 京都歴史裏の小説...伏見稻荷大社はインターネットの神様...1300年前のお話で私のペンネーム「伊奈利」の由来どす。その7

まだ都が奈良にあった711年ごろに奈良から新天地を求め旅をする家族があった。この家族の総数は12名で家長は「伊呂具」という中国帰化系の秦氏の血筋になる。この伊呂具が深草の地を訪れこの部族の長でもある藤森神社の神主に一族を住まわせてほしいと願ったが、神主はこの地も狭くて人が住める土地はないといった。しかし、この神社より北半里のところに伊奈利山というのがある、その中腹には末社の「藤社」という小さな祠があるが、ここならお連れの子供2～3名なら雨露ぐらいはしのげるから貸してやるといつてくれた。

そのころの京都というのは鴨川の右岸(西側)の堤防はなく雨が降るたびに水があふれ、一年を通しても湿地帯で人はとても住めなく原住民は鹿などの狩場に使っていた。縄文時代から弥生時代の人は鴨川より東の森の糺の森(下賀茂神社)には北の部族「賀茂族」、南にこの藤森の藤族しか住んでいなかった。

そして東山も草木の一本もない中国の枯山水のような山でした。その伊呂具が借りた藤社の裏山も花崗岩できていて雨や風で風化した白い砂が川のように流れて鴨川の流れも大きく押し曲げていた。その伊奈利山から鴨川までの地名を「砂川」といい1400年前の地名を今も使っています。(砂川小学校など)

伊呂具一族が借りた祠の中は2畳ほどの広さで小さな子供3名をそこで寝起きさせ大人は花崗岩を掘って穴倉生活になったが、その山には先に穴を掘って暮らしていた狐の家族の穴も数100もあった。伊呂具は家族を二つに分けて一斑は近くの鴨川や沼地で鯉、なまず、うなぎ、夏には鮎、そして鹿や猪、うさぎを獲っていた。元々この伊呂具らというのは土木、植林、稲作、魚師の専門集団で鴨川での漁は連日の大漁だった。もう一斑はこの藤社から大和街道までの参道の整備だった。この距離は約200メートルだが、大量の砂の撤去に一年はかかっていた。この大和街道というのはまだ京の都はなかったが、北国、信州、近江から奈良の都への一級国道だった。

伊呂具はこの大漁の魚や鹿、猪を売って金に換えて苗木を買って山に植えて砂の流失をストップさせていたから、この大和街道を旅する商人からも喜ばれていたが、さらに伊呂具は整備した藤社の参道入り口に「無料湯茶接待所」という看板を立てて旅人を藤社にお参りさせていた。湯茶接待所には伊呂具の娘らを巫女さんに仕立てて接待したものだから、若い旅人からお年寄りまで喜んでいただけではなしに、その噂をインターネットのごとくここを起点にして北国の若狭から新潟、信州から関東、奈良から大阪、四国、中国、九州の地まで藤社の人気はうなぎ登りにな

った。

やがて藤社は「伊奈利神社」と社名を変更して五穀豊穰と今でいう「旅の交通安全」のお守りまで売って旅人のお土産にもなった。そして直営の茶店も参道に数店だしたものだから金はどんどん入ってきた、しかし、伊呂具はそれを社殿の建造にすべて使っていたから、この地の持ち主の藤森神社より社殿は大きくなったのです。元々藤森神社は藤族300名ほどの守り神でしたから、そんなに裕福でなかった。そこで藤族の人々は「ひさしを貸して母屋を取られたとか、伊奈利神社は商売が上手い」と噂していたが、その噂から伊奈利神社は「商売の神様」になったのです。

それから80年後に長岡京から京都に都が移された。天皇も公家も商人もすべて新しい都にお引っ越しをしてきた。都の外には見渡す限りの田園(伏見、淀、九条、西七条、鳥羽)が広がった。それまで旅の交通安全を売りにしてきたが、こんどは社名を「伏見稲荷大社」に再び変更して五穀豊穰の神として京都の都の農民をお得意様にして、商売繁盛、五穀繁盛の神として衣替えをして現在に至っています。

それから1300年も伏見稲荷大社は藤森神社から土地を無償で借りてまだ返していません。島根県の竹島に韓国軍、沖縄には米軍、そして北方四島にもロシア軍がいるようになかなか実行支配されたら歴史的にも法律的にもこの伏見稲荷大社の土地は藤森神社の物だが、理屈では通らないということを教えてくれたのも稲荷神社になります。

この伏見稲荷大社の支店というのか分社(〇〇稲荷神社)は全国で3万社とも5万社ともいわれていますが、この伊奈利神社が発展したのは一級国道に神社を置き、そこを起点に全国に情報を発信したおかげですから、もう伊呂具は1300年前に現在のインターネットを考えていたのかもわかりません。ということで、これからの伏見稲荷大社は「インターネット」の神様に衣替えするそうです、キャハ

関連画像は↓のブログにあります。

<http://ameblo.jp/inari24/entry-11739886170.html>

京都歴史裏の小説... 8話...大枝山の鬼退治...坂田金太郎...酒呑童子 金太郎は男装の麗人だった。

金太郎は父坂田蔵人、母八重桐の間に生まれた女の子だったが、金太郎が生まれると同時に父は病死した。坂田家は代々宮中の料理人として歴代天皇の料理を采配してきた名家でその位は直系世襲制になっていた。そこで坂田家一門では生まれた女の金太郎を金時という名前で男として育てていた。その金時は当時としては高い背も160cmほどあり、身体も大きく武芸、馬術も名人級でなんなくこなしていたから宮中はもちろん都人まで金時を男として疑わなかった。

疑われていない証拠に都中の若い女性のアイドル的存在になり坂田家の屋敷があった堀川一条上がるには金時を一目見ようと朝夕に金時が宮中に出退勤する時間には毎日数十人の金時ファンの人垣ができていた。その人気ぶりは都を警護する武将「源頼光」まで届き金時を家来にしたいと申し入れてきた。母の八重桐はその申し入れにまさか金時が女だということはいまさらいえない立場になっていた。そこでやんわり断りを入れたが、源頼光は折衷案として坂田家が養子をもらいその子に料理人の位を譲ることを認めるまでとやってきた。さすがに天下の武将には逆らえず金時は源頼光の最高位の武将となった。

そのころ都では夜な夜な盗賊団が大店の店を狙い強盗、火付け、若い娘の誘拐事件が発生していた。その盗賊団は大枝山の峠、老の坂を拠点に丹波から京の都に入る荷物を略奪している山賊で頭は「酒呑童子」という。この山賊退治を天皇から命令された源頼光は金時に兵100名を与えて山賊退治を命じた。金時その時18歳の初陣でもあった。大枝とは今の京都市西京区大枝になる、都からは約4里で金時は5月5日早朝に都を出発して大枝の民家を借りて密かに陣を張った。その村人によると酒呑童子は酒好き、女好きで、特に女好きは異常で毎晩違う女を抱かなければ気が収まらないという性格だという。そこで金時は庄屋の娘の晴れ着を借りて女装していた、元々金時は女だから女装とはいわないがこの場合は女装になる。化粧も念入りにして手土産として酒の樽を大八車に積めるだけ積んで家来4名にひかせて老の坂を登っていった。

老の坂の峠の頂上付近に近づくと山賊の見張り番が現れた、金時は「ごくろうさまです。これは大枝村の庄屋さまから酒呑童子さまへの貢ぎものです。私は庄屋の娘で八重桜と申します」

月の光で金時の美貌が照らし出されて見張りも使ったことのない丁寧な言葉で砦に案内してくれた、金時は部下に命じて酒樽を要所要所の見張りに置いていた。砦に案内された金時は酒呑童子に、

「私は庄屋の娘で八重桜と申します。5月5日は大枝村の鎮守の神様のお祭りになります。今年もおかげで豊作となりそのお礼にと伺いました」

本来なら大枝村を襲い若い娘を誘拐しているのにお礼とはおかしいが、この金時のあまりの妖艶さにそれを疑いもせず大宴会が始まった。手下はどうやら50名ほどでこの宴会場にいるのは半数でその半数は今頃見張りの持ち場で同じように金時が差し出した酒で宴会をしていると想像できる。

そのころ金時の兵100名は峠の下で待機していた。宴会から3時間ほどしたころ金時の部下が山を駆け下りていたが、見張りの兵はすべて酒を飲み寝ていた。そこで一気に金時軍は砦を攻めていた。それに気がついた酒呑童子は「おのれ〜計ったな〜」というまもなく金時が酒呑童子愛用の大鎌(マサカリ)で酒呑童子の額を割っていた。

金時はその明るる日の6日には馬にまたがりそのマサカリをかついで羅城門から入り都中を凱旋パレードをしていた。それ後に都では5月5日を酒呑童子を金時がやつけた日として祝い、それから童子の日、こどもの日と変化していたのです。今でも鯉のぼりの鯉に金太郎がマサカリを担いだ絵柄があるが、これは大枝山の鬼退治の話が語り継がれているからです。(音川伊奈利)





これはYahoo画像の借  
り物です。